



デス・ エデュケーション

「お別れ会」さくら苑にて



死こそ、人生最大の事業である

メモリアルピークにお参りをするさくら苑職員とご入居者

死を隠さない

さくら苑では開苑以来、苑で旅立った方々の「お別れ会」を行ってきました。食堂ホール中央にご遺体が安置され、ご家族が旅立つ人に寄り添います。周囲を仲間のご入居者、職員が大きな輪になって囲みます。そして一人ひとり進み出て花を手向け、手を合わせて別れを告げます。

会場ではご家族が、時にユーモアを交え想い出話をしてくれます。「戦後の混乱期でした。ある日の深夜、ふと私が目を覚ますと母は薄暗い電灯の下で内職していました」「普段は優しいけど曲がったことは許さなかった」などと語られます。それを聞いて私たちは、亡くなった方の知り得なかった人生に出会います。そのたびに、ああご苦労の多い中にも精一杯生き抜いた人生だったんだろうな、その人のために心を込めて支援できただろうかと考えさせられるのです。

「死」というと私たちはつい「縁起でもない」などと否定的になります。でも最後の瞬間まで、希望を持って生

き生きと生きていれば、死もまた、静かに受け入れることができるのではないのでしょうか。ネイティブ・アメリカンが今に伝える「今日は死ぬにはもってこいの日だ」という言葉のように。

前述にもある通り、上智大学名誉教授のアルフォンス・デーケン先生は、「デス・エデュケーション」-「死への準備教育」を説いておられます。その思想の一部は、自分らしい死のあり方を考えることによって、死を迎えるまでの人生をより充実させられるという考え方だと思います。これは、私たちの願ってきたことに重なっていました。

さくら苑開苑以来、私たちは死を隠さず、オープンにしてきました。特養ホームには、終末期ケア等のため静養室設置が義務付けられています。私たちは、終末期ケアの方の状況を見て、特に必要と思われる時以外は、ご自分の部屋で過ごしてもらうことにしてきました。ご本人の意識が鮮明であれば、もう生きて再び出ることはない静養室に移されることは非常に淋しいものではな

いかと考えました。自分の部屋で、ご家族や仲間たちに見守られて…との願いもあるのではないかと考えました。親しかった方が、その方の部屋を訪れて声をかけたり、足をさすったりしてくれました。

死を否定的に思わないで、できれば納得感をもって受け入れることができれば、旅立ちの時にも心安まるものがあるのではと考えます。

死を、生の旅路が成就する日と考えることで、介護のあり方も変わってくると考えます。ナイアガラの滝へ出かけた方から「それは子どものころからの夢だった」という言葉を引き出したのは、職員がかけた一言でした。「何か、やってみたいことはありませんか?」。その職員が、その人の元気な姿をもう一度見てみたいと思い、伝えた言葉が大きな変化を呼び起こしました。

介護や看護、リハビリを自らの仕事に選んだ私たちにとって、人の老いや死と向き合うことは自分自身を見つ

最後の瞬間まで、希望を持って
生き生きと生きていれば、死もまた、
静かに受け入れることができる。

め直すことにもなります。一日一日いい人生を生きてもらうために、どんな働きかけをしよう、どんなことを提案してみようかしら? それを考え、具体化する…その働きかけこそ意味深い大切な介護活動ではないでしょうか。

お別れ会に参加した方が「私の時にもやってね」と言うていただきました。お別れ会がご入居者の方々に受け入れられていることを感じる言葉でした。

なりたい自分のピークが 旅立ちの時-「死」

昭和62(1987)年に造ったメモリアル・ピークには、現在35人の方が眠っておられます。メモリアル・ピークを造ったのはさくら苑で亡くなられ、事情があってご家族に引き取っていただけない方を「無縁仏にはしたくない」という職員の願いからでした。

富士山の形をした石塔には、2つの意味があります。ひとつは私たちの法人名である秀峰、すなわち至高山・富士山。最も美しく気高い姿を表現しようとしています。もうひとつは、人は誰も自分の生涯の夢を成就させ最も高い地点-ピークに到達して旅立って行くことが理想の姿ではないかという思想を表しています。

このメモリアル・ピークは、デス・エデュケーションの考え方とつながっています。

通常、肉体的な死をもって「死」と受け止められていますが、その人の精神は生前の言葉や行動などとして記憶され、残された人々に語り継がれて生き続けるものだと思えます。



アルフォンス・デーケン先生と都筑の風桜花嬢(渡辺ギンさん)

地域の皆さんと共に生きる — それ が「南永田桜樹の森」のコンセプト

平成14(2002)年に南区に開設した「特別養護老人ホーム 南永田桜樹の森」は、秀峰会にとって、大きなステップアップの機会でした。

その理由は2つあります。ひとつは、特養ホームの中に在宅介護の多様なサービスを併設したことです。デイサービス、ショートステイ、居宅介護支援、訪問介護、訪問入浴、福祉用具貸与を配置し、さらにその近くに訪問看護リハビリステーションを設置しました。これによって総合的なサービス提供を行える体制が整いました。

もうひとつは、住宅街に立地しているのも、身近な総

合的介護サービス拠点として他の社会資源と連携しながら、迅速かつシームレスに要介護者を支援できる体制ができたことです。

平成11(1999)年度、横浜市でこの場所を含めた3箇所で特養ホーム建設運営の事業者募集が公示されたとき、私たちは迷うことなく南区の事業に応募しました。他と違って住宅街に立地していたからです。事業の方向性として、施設運営と並行して在宅介護に力を入れていきたいと考えていた秀峰会としては、住宅が密集している地域で総合的にサービス提供ができるメリット

があると考えたからです。

この仕組みができれば、多種複合的サービスを必要とする利用者にも、顔馴染みのスタッフが効率的かつ継続的に関わりを持つことができます。

建築デザインは、建築家の武田暁明先生に依頼しました。明るく軽快なイメージの表現を願い、赤いレンガタイルと白い柱、御影石を組み合わせた外観にしました。館内居住区のデザインは京都町屋風としました。廊下は一間ごとに柱と梁があり、車いすでも通っても一間ごとに風景が変わって見えるように工夫しました。4つの階ごと

に基調色を春夏秋冬で色分けし、部屋は全室個室としました。

「桜樹の森」は、ハード、ソフト共に秀峰会が求め続けた理想を形にできた施設で、創業以来18年間積み上げてきた経験の集大成とも言えるものでした。

秀峰会がその後本格的に構築を進めた介護支援システム「ヒューマン・ケア・ネットワーク」の構想は、この「桜樹の森」の実践結果から生まれました。



京都の町屋風の内装

階ごとの色調は四季を表す

多種サービスの 統合的展開へ



重度の介護を要する人が利用する入所施設です。
施設規模は利用者50人から100人、或いはそれ以上。

特別養護老人ホーム



多様な在宅系サービスの中から必要なサービスを受け、
住み慣れた自宅での生活を続けることができます。

自分の家(在宅ケア)



自宅と施設を往来しながら
馴染みの地域で生活を続けられます。

小規模多機能型居宅介護



認知症の方が利用する入所施設。
施設規模は1ユニット利用者9人以内で小規模です。

グループホーム

■「Small is Beautiful」へのチャレンジ

平成12(2000)年、介護保険制度が始まりました。これは要約すると、介護を要する状態になっても、できるかぎり自宅で自立した日常生活を営めるように、真に必要な介護サービスを総合的・一体的に提供する仕組みと説明されています。これにより、介護のあり方は大きく転換することとなりました。制度の理念に応えるためにはコンプライアンスを確立し、ご利用者本位のサービスを提供しなくてはならないのだと強く考えました。

秀峰会は、介護保険制度が施行される前から在宅系サービスを提供してきました。

平成5(1993)年。「花の生活館」は神奈川県初のショートステイセンターで泉区緑園に開設しました。高齢者をお世話する家族が介護疲れ、病気、出産、冠婚葬

祭などの理由で一時的に介護ができなくなったときに、介護する方の状況に応じて短期間利用できる施設です。在宅支援強化の介護保険制度の目的に連なるサービスです。

平成8(1996)年。「真珠の詩」は、横浜市内初の認知症対応のデイサービスセンターです。さくら苑の敷地内に開設しました。認知症のご利用者を自宅から送迎、午前9時35分から午後4時35分までお預かりし、介護に当たっているご家族を支援しています。

平成8(1996)年。訪問看護ステーション「銀の舞」を旭区二俣川に開設。以来、訪問看護サービスと共にリハビリテーションサービスを提供しています。現在、看護師15人、セラピスト7人が各家庭を訪問、床ずれの処置や

予防、身体機能の回復と維持、その他状況に応じたサービスを提供しています。

また、対人サービスである介護は「Small is Beautiful」志向が望ましいと、私たちは考えています。

平成9(1997)年。グループホーム「樹林の風」を旭区下川井町に開設。認知症の方9人が生活する施設です。「樹林の風」はまさに、「Small is Beautiful」の実践でした。生活場所としての「Small」の最小単位は本来自宅、すなわち在宅ケアを意味します。

少人数のご入居者が家庭的な雰囲気の中で、個室で生活できるグループホームは、大規模施設と違って自宅の生活に一步近づいた施設と言えると思います。それ

までの特養ホームでは特に認知症の方にきめ細かく対応することは難しい面がありました。その点、グループホームではご入居者の状況に応じてきめ細かく応えることができます。

秀峰会の基本的な考え方に、すべての物・サービスの提供の形は「個別ニーズによりきめ細かくタイムリーに適應する形」に向けて進化するという発想があります。歴史を振り返ると、住まい、自動車、電話などすべてがその流れで発展してきました。介護もまたその方向で進化してきました。大きな特別養護老人ホーム⇒9人のグループホーム⇒小規模多機能型居宅介護⇒自宅という流れはそれを示しています。秀峰会はその動向に沿って活動を進めてきました。